

不登校経験者の心理教育的グループ・アプローチ体験と意義 —参加メンバー感想の分析—

友納 艶花^{*1}・顧 佩靈^{*2}

^{*1}九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

^{*2}九州大学キャンパスライフ・健康支援センター 福岡市東区箱崎6-10-1

(2016年11月10日受付、2016年12月8日受理)

要 旨

本研究では高校を卒業したものの進路が未決定である不登校経験者5名を対象に、約1年間に亘って行った全16回の心理教育的グループ・アプローチを取り上げた。各回のグループ終了時に記入してもらった不登校経験者の感想についてKJ法を用いて分析し、グループ体験と意義を検討した。その結果、得られた14個のカテゴリーから大きく4つの心理的体験が示唆された。また、図解化により心理的体験の【①スキルの獲得の自覚】は社会適応形成につながる「レディネス」を高め、メンバーの【②感情行動の変化】と【③考え方の変容】にそれぞれ影響を及ぼしている過程が示された。続いて、この3つの心理的体験は【④肯定的な自己像の表れ】に影響を与えて、社会生活への適応の可能性を高める自己の変容が生じたと考えられる。全体験を通して、メンバーの認知行動的变化が認められ、本アプローチが不登校経験者への心理的支援として意義があることが検討できた。

1. 問題と目的

学校教育における不登校の問題は、依然として憂慮すべき状況となっている。そのため、文部科学省ではスクールカウンセラーの配置、適応指導教室の設置など施設を充実させることによって不登校の数は一時減少がみられている。しかし、平成27年度の学校基本調査結果によると平成26年度間の30日以上長期欠席者のうち、不登校を理由とする児童生徒数は12万3千人で、小・中学校とも前年度より2千人程増加している。図1では、平成26年度の発表した「不登校」を理由とする者の全児童生徒数に占める割合の推移を参考用に示している。また、内閣府(2009)では、不登校経験者へ中学校卒業5年後に調査を行ったところ、約6割の者が自分の課題は「人とうまくつきあうこと」であると挙げられている。つまり、不登校及び不登校経験者には対人関係や社会的不適応の問題を抱えている(猪子ら、1992;高橋ら、1987)ことが考えられ、支援の工夫が必要であると言える。

そこで、文部科学省は不登校解決の最終目標は「社会的自立」であり、不登校問題を「心の問題」としてだけでなく「進路の問題」として捉えることが大切であるとしている。長谷川(2016)は、不登校生徒が学校における学びの意味を喪失し、高校を中退するなど学

校教育から離れてしまうことは、その後の進路選択に多大な影響を与えると指摘している。義務教育後の高校における不登校や中退の増加が深刻な教育課題となるなかで、近年では、その受け皿として通信制高等学校に対する認知も進み、1992年には6校であった通信制高校が2015年には217校に急増し、生徒数も約18万人に増加している（大橋・宗、2016）。しかし、全日制高校で人間関係や学習上においてつまづいた不登校経験者を受け入れている通信制高校では、その生徒の状態や特性を考慮し「最低限の通学による高校卒業認定」を受け取るケースがあることも事実である。さらに、文部科学省による平成26年度学校基本調査では、全日制の大学・短大進学率が53.9%に達しているが、通信制高校では16.7%（平成24年3月の文部科学省のデータ）である。そこで、通信制高校での不登校経験者の進学支援に関する研究も見られるようになってきている（長谷川、2016）が、通信制学校を卒業した後、様々な事情を抱えたまま進路が決まらず、行き場がなくなった不登校経験者向けの支援に関する研究はあまり見当たらない。

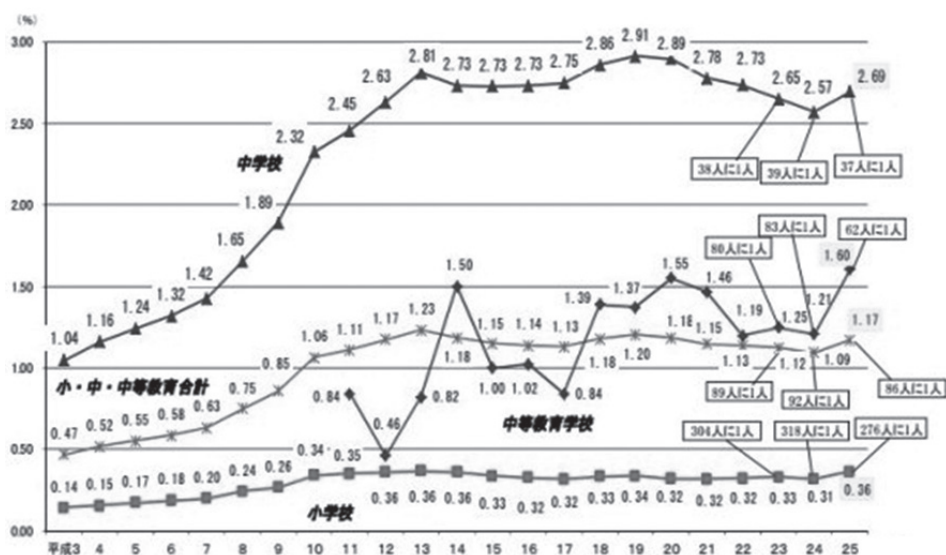


図1 「不登校」を理由とする者の全児童生徒数に占める割合の推移(文部科学省、H26年度発表の資料)

他方、近年の不登校生徒への教育的対応として、現在スクールカウンセラーの配置、適応指導教室の設置など施設が充実されるようになり、フリースペース、教育センターなどの適応指導教室などでは社会とのつながり、不登校状態の進行によるひきこもり防止のため、不登校生に居場所を提供している。さらに、学校現場内では複雑化する状況に対応する未然防止の取組として、ストレスマネジメント教育やアサーショントレーニングなどの心理教育的アプローチが新たに展開されている（文部科学省、2010）。集団に溶け込めず、対人関係やうまくコミュニケーションが取れないなど不登校生が抱えている悩みと問題からみて、小集

団に適應し、対人関係におけるスキルを獲得するためのグループ体験は大変望ましいことと言える。そして、不登校経験があり社会に進出するには、適應につながる人付き合いや肯定的な自己受容、ストレス対処力を形成してレジリエンスを高める必要があると思われる。

ところが、強い対人緊張や対人不安の問題などを抱えている不登校ケースに対してグループ・アプローチの実施は容易ではなく、主に個別面接（本多、2014；小笠原、2009）と親面接、親グループによる支援（中地、2012）の研究が行われてきている。さらに、不登校の経過を長期的にみると、義務教育期間中における復学、進学のみならず、不登校経験者の予後の追跡調査を通して得られた結果考察で示されているように長期的支援が必要（福岡ら、1980）であると思われる。しかし、これまでは義務教育期間中および全日制・通信制高校に在学中の不登校・不登校経験者に関する研究がほとんどで、高校卒業後にも依然として問題を抱えて行く場がなくなる不登校経験者を対象としたグループ・アプローチの研究は非常に少ない。また、心理教育的グループ・アプローチは有効であろうと思われるが、グループ参加を通して得られた心理的体験過程について検討した研究はほとんど見当たらない。

そこで、本研究では、高校を卒業した不登校経験者を対象に地域援助の立場から約1年間実践した心理教育的グループ・アプローチ（以下PEGAと略記）を取り上げる。そして、各回の実践終了時に記入してもらった参加メンバーの自由感想記述文からPEGAが不登校経験者へどのような心理的体験をもたらしているのか、また、不登校経験者の心理体験過程と意義について検討することを目的とする。

II. 研究方法

1. PEGA参加メンバー

不登校経験があり、通信制高校に進学・転編入学して高校卒業資格を得たが、様々な事情を抱えて進路未決定となった男子2名、女子3名（表1）で、合計5名であった。平均年齢は20.80歳。

2. PEGAについて

参加メンバー及び保護者とは事前面談を行い、メンバーが抱えている問題、参加への不安や期待などについてアセスメントを行った。その上で、「人付き合いができるようになる」「進路方向を自己決定できるようになる」ことを目指し、プログラムの調整を行った。アセスメントから終了まで約1年間実施された。概ね2週に1回、毎回90分間、全16回実施（表2）。

3. アンケートと分析方法

各回終了時に自由記述形式による感想を求めた。得られたデータは、KJ法（川喜田、1986）に基づいて分析を行った。KJ法とは一行見出しによる質的分析法であり、分析方法

の特徴としては、時間経過に伴う変化の全体像を明らかにすることができるといわれている(塩満、2013)。また、図解化によるプロセス把握が可能であることから本研究に適していると判断した。

分析の手順、①ラベルづくり：感想において、複数の記述文につき、同じ記述、或いは、類似していると判断される記述文を一つのまとまりとし、一つのラベルとした。反対に1つの記述文に2つ以上の異なる内容を記述したものは2つのラベルに分け処理をした。②カテゴリー探索：すべてのラベルを並べ繰り返し読んで、内容が類似していると思われるラベル同士を順次セットにして、「ラベル集め」作業を繰り返す。それ以上セットできない時点で内容を要約し、「カテゴリー」を見出していく。③カテゴリーの検討・修正(複数評定者による分類)：分類の信頼性を確認するために、心理学を専門とする教員1名と臨床心理士資格を持つ2名で分類過程とラベルとカテゴリーについて検討を行った。第1著者の分類と一致しなかった部分について、再度検討し、修正を行った。④カテゴリーの決定と図解化：以上の手続きにより、最終カテゴリーを分類した上、図解化を行った。結果の一致率が94%であったため、分類・図解化は信頼性があるものと判断した。

表1 参加メンバーのプロフィール

参加者	A 男	b 女	c 女	d 女	E 男
初不登校時期	中学校	中学校	小学校	中学校	高校
通信制高校への入学形態	全日制高校での不応 による転編入学	全日制高校での不応 による転編入学	中学校からの進学	全日制高校での不応 による転編入学	全日制高校での不応 による転編入学
高校3年生時 登校状況	個別対応 月に2回程度	クラス所属* 月に2回程度	個別対応 週に1回程度	クラス所属* 週4回程度	クラス所属* ほぼ不登校
PEGA参加前 抱えている困難	うつ(診断有) 対人不安 引きこもり傾向	不眠障害(診断有) 無気力	対人不安 自信がない	吃音 対人不安 自信がない	無気力 自信がない 引きこもり傾向
PEGA終了後の進路	積極的に治療を受け始める	アルバイト開始	専門学校進学	大学進学	大学進学

*クラスは10人程度の集団

表2 PEGAの回数、形式と内容

回数	形式	テーマ	回数	形式	テーマ
1	講義 演習	不思議な心の認知	9	グループ ワーク	合同コラージュ
2	講義 演習	発達と青年期の発達課題	10	講義 演習	ストレス対処とアサーション
3	グループ ワーク	BEG方式フリートーク・タイム①	11	演習	実用コミュニケーション・トレーニング
4	講義 演習	人を動かす心の要因	12	グループ ワーク	BEG方式フリートーク・タイム③
5	講義 演習	性格と行動	13	講義 演習	上手に考え、気分すっきり
6	グループ ワーク	BEG方式フリートーク・タイム②	14	講義 演習	人間の思考力
7	講義 演習	伸びる自己表現力①	15	グループ ワーク	私のライフラインのプレゼンテーション
8	講義 演習	伸びる自己表現力②	16	講義 演習	全体振り返り&プログラムの総括

III. 結果と考察

I. KJ法による心理的体験の分類

KJ法に基づいて分析を行った結果、14個の中カテゴリーが得られ(表3)、さらに、大カテゴリーとして【①スキル獲得の自覚】【②感情行動の変化】【③考え方の変容】【④肯定的な自己像の表れ】の4つの心理的体験がみられた。以下、それぞれの結果と考察を行った。

まず、14個の中カテゴリーの具体的内容と割合をみると、不登校経験者の感想(*以下の感想例文は全部「」を入れた)から、「アイデンティティの確立の必要性について学ぶことができてよかった」、「やる気の出し方の構造がよくわかって非常にためになった」、「自分の性格がどういうタイプか知ったことで自分の性格や行動を見直す良い機会になった」など性格や行動面において<自分を見つめる知識の習得>が12%示され、最も高い該当率となった。また、「自分自身の考えではなく人の考えも聞くことを学んだ」、「来る前はいろいろ思い込んでいたが様々な考え意味での場となった」、「人の考えも聞けるようになった」、「自分の考えにはないものをたくさん見つけていきたい」という<考え方の広がり>が11%、「人との話の楽しさを学んだ」、「言葉を介さず他人に自分の気持ちを伝えることがいかに大変であるかよくわかった」、「言葉だけで無表情では意味がないと知った」、「ポジティブ的に考えていい方に考えを変えていく勉強ができた」など他者との関わりにおいて必要なく社会的スキルの獲得>が10%とそれぞれ比較的に高い該当率が示された。

次に、「過去を振り返り未来に展望を持つことでやる気が湧いてきた」、「昔はいろんなことがあったけどそれがあったからこそ今があるので今を乗り越えて少しでも楽しいことがあれば良いと期待している」など<今後の自分への期待>が9%、「こういう場は自分が苦手とするものだったが慣れたら楽しい」、「全体を通して自分自身も少しは明るくなった、少し

ずつ人の接触到慣れてきた」など<不安が打ち解けていく感覚> (8%)、「目と目をみて、相づちをかけて話をした方が楽しいと思った」、「自分で進んで感想など言えたりして自分でもびっくりした」など<自己発言ができた喜び> (8%)であった。そのほか、<表現の難しさ>、<慣れたい気持ちと探索>、<継続参加できたことへの肯定>が同じく7%、<他者と関わりができた楽しさ> (5%)、<学ぶ意欲の向上> (4%)、<進路について再考> (4%)、<自己成長への受容> (4%)、<初期の緊張と不安> (3%)の順であった。

そして、心理教育的グループ・アプローチの参加を通して、不登校経験者に見られた4つの心理的体験を詳しく見ると、第一に、【スキル獲得の自覚】という心理的体験がみられた。各回の前半では認知、発達、動機付けなどの心理教育が行われ、後半では人とのつき合い方、会話の仕方、ストレス対処などグループ演習を主に行った。メンバーの「自分の性格や行動を見直すよい機会」「ストレスをどう対処すればよいか学べた」「言葉だけで無表情は意味がないと思った」などの感想から様々な知識やスキルを身につけていると認識できたことから【スキル獲得の自覚】が考えられる。第二に、【感情行動の変化】という心理的体験がみられた。メンバー全員が不登校経験者であるということから、初期の対人緊張と不安感が強かった。しかし、PEGAを受けながらグループの中でゆっくり話す体験を通して、徐々に感想を言うようになるのである。そこで、他者と関わる嬉しさや楽しさが生じたことから【感情行動の変化】があったと考えられる。第三に、【考え方の変容】という心理的体験がみられた。異なる考えを持ち、聴く、話す、かかわることを通して、自身の思い込みに気づき、他者の意見に耳を傾け、多面的に考える姿勢が見られるようになったことから【考え方の変容】が生じたと考えられる。第四に、【肯定的な自己像の表れ】という心理的体験がみられた。メンバーの「昔はいろいろあったからこそ今がある」「前向きに考えることができるようになった」「人前で話すことが嫌だと思わなくなったことが一番の成長だ」などの感想から不登校経験を持つ自分の過去を肯定的に受容し、前向きに考えるように変化していたことから【肯定的な自己像の表れ】があったと考えられる。

2. 図解化にみる心理的体験過程と意義

本研究では、カテゴリーを決定した上で3名の心理学を専門とする研究者で図解化を行った(図2)。全過程を通して、不登校経験者にとって4つの心理的体験過程にどのような意義があったか以下に考察を行った。

まず、不登校経験者にとって【スキルの獲得の自覚】が自他理解を深め、人間関係づくりを促進させる基礎をなすものであったと考えられた。社会的スキルの欠如が青年期の対人関係や社会場面でうまく適応できない大きな理由である(浅川ら、2001)。そこで、「レディネス」としての知識スキルを習得し、自分を見つめ直すきっかけになる意義が与えられたと言える。これは、表3のカテゴリー分類で示されている<自分を見つめる知識の習得>などの該当率

表3 参加メンバーの感想記述から生成されたカテゴリーと具体例

カテゴリー/該当率	感想記述内容の具体例(一部)
自分を見つめる 知識の習得 12%	アイデンティティの確立の必要性について学ぶことができてよかった。/けっこう思うところがあった。/やる気の出し方の構造がよくわかって非常にためになった。/内発的な心理について、興味が出てきた。/自分自身を見つめてみたい。/これから失敗しそうであと一歩を頑張ってみようと思った。/自分の性格がどういタイプか知ったことで自分の性格や行動を見直す良い機会になった。/他人の長所を見つけるのは楽しいので、それと同じ感覚で、自分の長所を見つけれたいと思った。/自分自身をほめるということは、自分の長所を知らなきゃいけないと思った。/人生を考えた上で今はとても短いと思った。/とても自分が分かったと思う。
考え方の広がり 11%	自分自身の考えではなく、人の考えも聞くことを学んだ。/授業ではいろんな考えがあるんだなと思った。/今回のような取り組みは経験がなかったので新鮮だった。/なるほどと思ったり、ためになると思うことがたくさんあった。/一人でやっていることから、みんなでやると、達成感は大きくなった。/自分の考えにはないものをたくさん見つけていきたい。/みんなのように自分の考えをまとめられるようになりたい。/来る前はいろいろ思い込んでいたが、様々な考え意味での場となった。/人の考えもきけるようになった。/1つのことについていろんな考えをみることができた。
社会的スキルの獲得 10%	人との話の楽しさを学んだと思う。/言葉を介さず他人に自分の気持ちを伝えるのがいかに大変かがよくわかった。/毎回目からウロコが落ちるようなことを知ることができて、とても有意義だった。/言葉だけでなく、無表情でも意味ないと今日知った。/ポジティブな考え、いい方に考えをすぐ勉強になった。/自分のストレスの種類・どう対処すればいいのかを学べたのがよかった。/受験に向けての不安などでストレスがたまることとおもふので、上手く解決していきたい。/人生設計通りに進ませるのは難しいと思うが、設計をすること自体に意味があると思った。
今後の自分への期待 9%	慣れると楽しいと思うので、自主的に取り組みたい。/昔はいろんなことがあったけど、それがあつたからこそ今があるので今を乗り越えて少しでも楽しいことがあれば良いと期待している。/過去を振り返り、未来に展望を持つことで、やる気が湧いてきた。/未来のことを考えるのが今日の授業を通して楽しんだと思った。/つらいことがあっても頑張れそうだ。/将来が楽しくなるようにしていきたい。/人生いろいろあるからこれから先落ち込んでしまっても頑張っていけるようになりたい。/勇気を持って行動していく。/自分の道を進もうとしていいなと思った。/いっぱいあっても退屈せずに前に進もう。
不安が打ち解けていく感覚 8%	こういう場は自分が苦手とするものだったので、緊張したけど、慣れたらとても楽しい。/少しずつ人の接触に慣れてきたと思う。/はじめの授業に比べて、皆よく笑うようになった。/今までで皆が一番イキイキとしているように見えた。/最初の頃と比べ、やることへの不安感などが薄れたように思う。/全体を通して自分自身も少しは明るくなったのではないかなと思う。/みんなある程度打ち解けているというか、緊張が解けていたように思った。/少しだけ輪の中に入れたように気がした。
自己発言ができた喜び 8%	ある程度は話せるようになったと思う。/だんだん増えてきて発言が多くなってきたと思う。/楽しく話をする人やつら、目と目を見て、相づちをかけた話をした方が楽しいと思った。/8回目になって、話しやすくなったと思う。/自分から言うようになったと思う。/久しぶりの授業だったけど、ある程度は話せたと思った。/自分で進んで感想など言えたりして自分で嬉しくなった。
表現の難しさ 7%	演習は面白かったが難しかった。/表現をするっていうことは、難しいと思う。/やっぱり言葉なしやつら、なんにもつたわかんないと思った。/この授業を受けて、かんじた事がなかったのにかんじることがなくなった。/自分では思っているより、なかなか出来ないのかビックリした。/思っていたよりも難しかった。/思い浮ぶことが少なかった。/もつとたくさん想像できるよこれからいろんな事を学んでいきたい。
慣れた気持ちと探索 7%	少しでも自分以外の人とコミュニケーションが取れていたら良いなと思う。/少しずつ言葉を発することに慣れたい。/後半になると慣れて大丈夫になるので、気持ちの悪さがなくなって、早く慣れてくるといいな。/会話をお互いの話に共感できるような話ができたら良いと思った。
継続参加できたことへの肯定 7%	実になった。/また機会があればやってみたい。/この授業に来てよかった。/辛いことがあってもここにきてよかった。/一年間これよかったと思う。/一年間最後まで続けてくれてよかったと思う。/一年間ありがとうございました。
他者と関わりができた楽しさ 5%	みんなかなり率直に話していると感じた。/作品を作る時に、自分が切り抜いたものを使ってくれた時、安心したのと嬉しかった気持ちがあった。/吃音でなかなか言葉が言えなくても、言うまで待っていてくれたのでとても嬉しかった。/色々話ができよかった。/今まで皆とゆっくりと話す機会がなかったのも、とても楽しかった。/グルーブトークでは、一人一人意見が違って聞いていて楽しかった。
学ぶ意欲の向上 4%	今度は、そのために何が必要かを学びたいと思った。/話す時の表情、聞く時の態度など日常で役に立つよう使っていきたい。/この場がなくなるのは少し不安だけど、学んできたことを今後活用していきたい。/ここで学んだことが将来どこかで役に立てれば良いと思う。
進路について再考 4%	自分は人とは競争しないで生きていく事と、自分がしたいことを仕事に生かしたいと思った。/それぞれの受験や将来に対する思いをきけたのでよかった。/受験の話も聞けたから参考になった。/みんな違う目標があって努力しているんだなと思った。/受験を前に自分を見つめなおす良い機会になってよかったと思う。
自己成長への受容 4%	自分の夢をやと見つけた。/あきらめようとする考えがなくなった。/この一年間物事を前向きに考えることができるようになった。/人と話すことが苦にならなくなった。/人前で話すことに嫌だと思わなくなったことが自分の中で一番の成長だ。
初期の緊張と不安 3%	初めてとても緊張した。/他の方からの印象では自分の思っていた通りになっていた。/少しづつ良い方に印象を変えていけたら良いと思う。/初めて緊張しましたが面白かった。

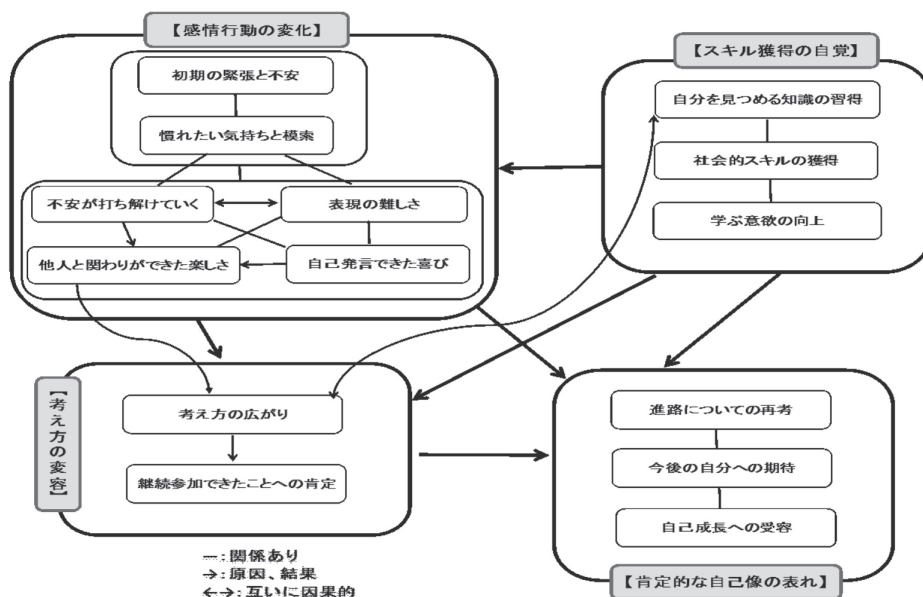


図2 図解化による心理的体験と意義

が最も高かったことから推測された。

次に、【スキル獲得の自覚】は不登校経験者の【感情行動の変化】と【考え方の変容】にそれぞれ影響を及ぼしていることがみられた。不登校経験者は自信が持てないこと、不登校群は登校群より関係づくりスキルが有意に低い（曾山ら、2004）ことが知られている。「レディネス」となる知識スキルの獲得は不登校経験を持っていた参加メンバーにやる気と自信を与えたと考えられる。そして、次第に他者に関わる行動がみられ、自ら進んで感想が言えるようになったのである。その結果、これまで抱いていた不安が喜びと嬉しさへと【感情行動の変化】を起こすことができた。

ちなみに、認知の変容には一定の知的能力が求められる（Beck, 1976）。また、三池ら（2009）は、学校社会復帰の必要条件を、①日常生活リズムの復活、②学習意欲があり、実際に勉強が頭に入ること、③複数の人の中に入っていきコミュニケーションがはかれることの3点が必要であると示している。不登校経験者の「授業ではいろんな考え方があるのだと思った」「毎回目からウロコが落ちるようなことを知る」などの感想から【考え方の変容】に心理教育の介入による【スキル獲得の自覚】の影響が考えられる。また、グループ演習で互いに関わり、他者と出会い、コミュニケーションを重ねていく中で、いい刺激と気づきを得られたことで「考える方法」が変わっていったと考えられる。これまで固着した考え方から他者の意見に耳を傾けるようになり、多角度から物事を考えるという思考の傾向が変わっていったことから【考え方の変容】につながる過程が見られたといえる。

最終的に【スキル獲得の自覚】【感情行動の変化】【考え方の変容】の心理的体験は不登校経験者を【肯定的な自己像の表れ】に導いていくことが窺えた。先行研究では、不登校経験者は自己肯定感が低く（成重・武内、2012）、否定的な自己像を持ち、対人不安傾向と密接に関連（Cheek&Buss、1981）していることが知られている。そこで、不登校の当事者たちは、似た境遇の者たちが集う場、学校的なものが周到に排除された場の中で、安心して自己の経験を語る／語り直すことができ、それによって、それまでの否定的な自己物語を書き換え、不登校体験を肯定的に受容できるようになる（貴戸、2004）ことが示された。つまり、自己認知像がポジティブである場合は適応度が高くなることから自己像を肯定的に評価できるか否かは好転の根拠と考えられる。今回のPEGAに参加したメンバーらの感想の検討からは、肯定的な自己像は「ひじょうによい」ではなく「これでよい」（遠藤、1992）という自己受容と自分への期待による肯定的自己を認識するようになったと考えられる。また、社会的コンピテンスが高まり、社会生活に適応できる可能性が高くなった自己の変容であったと言えるだろう。

3. まとめと今後の課題

本研究では、高校を卒業した不登校経験者を対象に地域援助の立場から約1年間実践した心理教育的グループ・アプローチを取り上げ、参加者の感想記述文から不登校経験者の心理的体験過程を検討した。また、本アプローチが不登校経験者への心理的支援として意義があることが検討できた。これからは、不登校及び不登校経験者の個々に抱えている課題と発達状況に応じながら、グループ・アプローチを通して集団に適応していく支援方法を模索していく必要があると思われる。しかし、公的な機関や大きな組織体ではないため、人的や予算に大きな制限があり、より包括的な支援が難しく、部分的支援とならざるを得なかったことは今後の課題であると考えられる。

謝辞：本調査研究時にご協力賜った先生方、ご支援いただいた方、そして、グループ参加メンバーの方々に厚くお礼を申し上げます。

【引用・参考文献】

- 浅川 潔司・東 由佳・古川 雅文 (2001). 青年期の社会的スキルと学校適応に関する心理学的研究 兵庫教育大学研究紀要, 1, 99-103.
- Beck,A.T., (1976). Cognitive therapy and the emotional disorders. New York: International Universities Press.
- Cheek,J. M., & Buss,A.H ., (1981). Shyness and Sociability. Journal of Personality and Social Psychology, 41, 330-0339.

- 遠藤 由美 (1992). 自己認知と自己評価の関係：重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討 教育心理学研究, 40, 157-163.
- 福間 悦夫・井上 寛・沢 真教・波根 督明・榎 轟 (1980). 登校拒否症の長期予後 精神医学, 22 (4), 401-408.
- 長谷川 誠 (2016). 高校不登校生徒の自立支援に関する試論 佛教大学教育学部学会紀要, 15, 139-151.
- 猪子 香代・杉山 登志郎・金子 寿子・本城 秀次・大高 一則・青山 隆・武井 陽一・平野 千晶 (1992). 児童青年期の神経症的問題における年齢特性について 児童青年精神医学とその近接領域, 33 (3), 218-226.
- 川喜田 二郎 (1986). KJ 法—混沌をして語らしめる 中央公論社.
- 貴戸 理恵 (2004). 不登校は終わらない「選択」の物語<当事者>の語りへ 新曜社.
- 小笠原 洋 (2009). 学校における「遊戯の場」の特徴とその意味--スクールカウンセリングにおける不登校生徒の事例による検討 心理臨床学研究, 27 (2), 208-219.
- 本多 早由里 (2014). 不登校を通して"本当の自分"を育んだ中学生女子との面接過程 心理臨床学研究, 32 (2), 204-214.
- 三池 輝久 (編)・間部 裕代・上土井 貴子・高野 美雪・川谷 淳子・友田 明美 (2009). 不登校外来一眠育から不登校病態を理解する 診断と治療社.
- 文部科学省 (2010). 平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査報告書
- 中地 展生 (2012). 不登校児の親グループ参加者の"ファシリテーター行動認知"と諸要因との関連：参加頻度,参加年数,グループのタイプの視点から 心理臨床学研究, 29 (6), 797-802.
- 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当) (2009). 高校生活および中学校生活に関するアンケート調査 (高等学校中途退学者及び中学校不登校生徒の緊急調査) 報告書平成21年度3月
- 内閣府 (2010). 特集—高等学校中途退学者の意識と求められる支援
- 成重 魅穂・武内 珠美 (2012). 中学時不登校経験者の社会適応の過程に関する研究—対人関係と自己肯定感に焦点を当てて 大分大学教育実践総合センター紀要, 30, 15-30.
- 大橋 節子・宗 寿子 (2016). 不登校経験者の生活リズムから見てきた生徒の学校適応—進路指導に向けた一考察 甲南女子大学大学院論集, 14, 9-17.
- 塩満 卓 (2013). 「カードワーク」田中千枝子編「社会福祉・介護福祉の質的研究法」, 中央法規出版, 79-97.
- 曾山 和彦・一本間 恵美子・谷 口清 (2004). 不登校中学生のセルフエスティーム, 社会的スキルがストレス反応に及ぼす影響 特殊教育学研究, 42 (1), 23-33.

高橋 隆一・野本 文幸・中屋 みな子・奥寺 崇 (1987). 不登校の類型分類, 児童青年精神医学とその接近領域, 28 (5), 299-311.

A Study on Significance of a Psychoeducational Group Approach on Persons Who have Experienced Truancy —An analysis of feedback from participants—

Enka TOMONO^{*1}, Peiling GU^{*2}

^{*1}Faculty of Humanities Department of Education and psychology
Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka Yahatanishi-ku Kitakyushu-shi 807-8586 Japan

^{*2}Counseling and Health Center Kyushu University
6-10-1 Hakozaki Higashi-ku Fukuoka 812-8581 Japan

Abstract

This study focuses on a 16-session psychoeducational group discussion which was conducted over a 1 year period, and comprised of 5 participants who, though have graduated high-school, were undecided on their future pathway. Each participant was asked to write their opinion after each group session, and their feedback was studied incorporating the KJ method. 14 categorical theories were gained from the sessions from which four main psychological experiences could be observed. Using diagrams, we analyzed the process of how 【①self awareness of skill acquisition】 had boosted a sense of “Readiness” to social adjustment, and how 【②change in emotional action】 and 【③ change in thought】 had influenced each member. Following this, we observed how those three psychological experiences had given a sense of 【④a positive self image】 to each participant, allowing a change in their capacity to adapt to social life. In addition, we observed a change in cognitive-behavior throughout the experience process, allowing us to conclude that this approach had a meaningful psychological effect on students who have experienced truancy.

Keywords : Persons Who have Experienced Truancy, Psychoeducational Group Approach, analysis of feedback